

編集方針

『日本経営学会史』編集長

片岡信之

日本経営学会が、学会として自らの歴史を纏めて公刊するのは、学会創立以来、今回がはじめてのことである。

日本の経営学の歴史を日本経営学会を中心として纏めた包括的通史が、これまでに全くなかったわけではない。山本安次郎『日本経営学五十年』（1977年、東洋経済新報社）は、最初にして殆ど唯一と言ってよい貴重な書である。しかし、この書はいまから40年前に、学会50年を機に個人として纏めて刊行されたものであり、それゆえ、初めての書であるという大きな意義とともに一定の限界を持っている。ひとつは爾後の40年間に当然ながら含まれていない事であり、他のひとつは、山本経営学の理念型とも言うべき「本格的経営学」の正当性を主張すべく、経営学説の潮流がその方向に収斂されていっていることを示そうとする一定の意図と傾向性を持って描かれていた事である。とはいえ、類書のない当時にあつては、同書は貴重であつたし、いまも依然としてそうであることは否定できない。

日本経営学会が人間の卒寿にあたる90周年を迎えるにあたり、学会として記念事業の最大イベントとして学会史を作成することが、学会理事会の提案で決まった。しかし、いざ取りかかるという段になって改めて具体的な作業を考えて見ると、過去90年間の学史を短期間で一挙に、詳細に検討して描くのは並大抵のことではない。その判断もあつて、提案者であつた当時の理事長海道ノブチカ氏と90周年記念事業実行委員会委員長小阪隆秀氏は、①とりあえず50周年までのところは山本教授の書に簡単ながら一応明らかにされていることもあるので、51回大会以後90回大会までの期間に今回は特化する、②具体的には、51回大会以後90回大会までの各大会の報告を収録した『経営学論集』第48集から第87集までの計40巻を数巻ずつ、ふさわしい執筆者に依頼して統一論題報告の内容紹介、時代的意義、今日的意義等

について書いて戴くという企画を立てられ、その案を持って私に編集長の依頼をしてこられたのであった。私は予てより日本の経営学史に関心を持っていたこともあり、重責に一抹の不安を感じつつも、喜んで承った次第であった。

学会員は多士済々、どなたに執筆をお願いするかを絞るのは困難を極めたが、この40年間を日本経営学会会員として体験してこられ、役員としても貢献されて学会事情に明るく、かつ平均20～30本相当の報告論文を短期間に読破して纏め・コメントできる健康体力と気力をお持ちの方ということをお勧めしての依頼となった。その意味で言えば、今だからこそ可能な生き証人の一流執筆陣の構成であって、10年後の企画であればもはや不可能だったであろう。

このようにして出発したのであるが、その際にたてた編集方針は下記の通りであった。

1. 標題は『日本経営学会史 創設51周年から90周年まで』とし、創設51周年から90周年までの40年間の大会を取りあげ、『経営学論集』第48集から第87集までの40巻所収の統一論題報告を対象にする。自由論題報告は対象から割愛する。
2. この40巻を2～3巻ずつに区分けし、各執筆者に分担して書いて戴く。
3. それぞれの分担執筆では、各巻(各回大会)の詳細な内容が分かるようになっているが、それだけでは各回大会統一論題テーマがなぜ・どのような時代背景のなかでそのように設定されたのかが、読者には必ずしもよく分からないかもしれないし、学会の議論の一連の流れが十分に理解出来ないかも知れない。この点を補完するために、まず最初に学会史の大きな流れを、時代背景との関連で簡単に記述する章をおくことにする。
4. 今回の企画では創設51周年から90周年までを中心的に取りあげるのではあるが、日本経営学会史と言う限りは、それ以前の歴史に全く言及しないわけにはいかない。学会の90年史を少なくとも概観しておく必

要はある。従って、学会創設にいたる前の状況、学会創設期の状況、それ以後の戦前・戦後50周年までの状況についても、簡単に大きな流れについて触れておくことにした。

5. 以上の3. 4. については、本書第Ⅰ部第1章で取りあげ、それを承けて第Ⅱ部第2章～第15章において、第51回大会～第90回大会(『経営学論集』第48集～第87集)の統一論題テーマを詳しく取りあげることにした。
6. 巻末資料においては、第1回大会から第90回大会までの大会統一論題テーマをすべて掲載した。これによって読者は、この90年間に日本経営学会が何を各時代の大会において重要なものとして取りあげ、どのような報告者が、どのような問題意識で論じたかについて一覧することができるであろう。
7. 巻末資料のところでも注記したが、『経営学論集』は、2017年3月末現在では、第1集以後第74集までがCiNiiでオンラインにて各論文にオープンアクセスできるようになっている。http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00068737_ja.html
また、第83集以後は日本経営学会ホームページからオンラインにて各論文にオープンアクセスできる状態になっている。ただ、残念ながら、第75集～第82集についてはまだ電子化されておらず、現在のところ紙製版に頼るしかない。
8. 上記6. で触れた巻末資料は、第Ⅰ部第1章で紙幅の都合上詳しく立ち入ることの出来なかった各大会のテーマ・報告者・開催場所・日時などの情報を補完する役割を果たすべく作成されている。両者は一体として内容的に完結する。従って、両方を相互参照しながら読んでいただければ幸いである。
9. 巻末資料は一覧性があるので、学会議論の流れとテーマを素早く把握するのに便利である。ここで関心を惹く大会、テーマを見付けたら、第Ⅱ部第2章～第15章の該当箇所に移るとか、CiNiiオープンアクセスに移るとかして、さらに掘りさげて行く事が出来るよう配慮して作成してある。
10. 本書は紙製版の他に電子版が発行される。電子版では、紙製版の巻末

資料に加えて，幾つかの追加資料を掲載する。

11. 本書では直接に対象としなかった創設大会～第50回大会については，将来，なんらかの機会を捉えて，学会として取りあげた学会史を作成して戴くことを期待したい。